

森鷗外略年表

西暦	年号	年齢		(所在)
1862	文久 2年	1	島根県鹿足郡津和野町に、津和野藩典医森静男と峰子の長男として生まれる。	石見国津和野町田村横堀 (現: 島根県鹿足郡津和野町町田イ二三一番地)
		5	藩校養老館教授村田久兵衛(美実)に論語の素読を受ける	
		6	藩校養老館の塾長米原佐(綱善)から孟子を学ぶ	
		7	藩校養老館に入学。四書五経の受講。四書正文を与えられる	
		8	四書集注を与えられる。秋ごろより父についてオランダ語を学ぶ。	
		9	養老館で春秋左氏伝、史記、国語、漢書を学び、蘭医室良悦にオランダ語を学ぶ。 6月、亀井藩は廃藩し、藩校養老館は11月に廃校。	
1872	明治 5年	11	6月26日、父に従い東京の向島に移る。 10月、ドイツ語習得のため洋学塾進分学社に入り、神田小川町西周宅に寄寓。	亀井茲監(これみ)の別邸(南葛飾郡須崎村五五番地)から向島小梅村八十七番地に借家(現: 墨田区向島四丁目一番地) 本郷寺岐坂本郷元町二丁目五七番地 (現: 文京区本郷一丁目二十六番地) 神田西小川町一丁目一番地(現: 千代田区西神田二丁目三番地)
1873	明治 6年	12	祖母於清、母峰子、弟篤次郎、妹喜美子上京。 11月、下谷和泉橋にあった第一大学医学校予科に入学規定の学齢に達しておらず、万延元年(1860年)生まれとし願書提出。以後、公的年齢はこの年齢となる。	
1875	明治 8年	13	戸籍を東京に移す。	家族は小梅村二百三十七番地に転居
1876	明治 9年	14	医学校が下谷和泉橋から本郷の加賀邸跡に移り、その寄宿舍に入る。官費生となる。	
1877	明治10年	15	医学校が東京大学医学部に改称され、4月、その四等本科生となる。 同窓に生涯の友となる賀古鶴所の他に、小池正直、谷口謙緒方収二郎がいた。父静男、千住の東京府区医出張所の管理を任される。	
1878	明治11年	16	父静男、区医となる。	
1879	明治12年	17	父静男、南足立郡設置とともに東京府から郡医を委嘱され、千住に居所を移す。橋井堂医院を開く	
1880	明治13年	18	寄宿舍を出て、本郷竜岡町の下宿上条に移る。このころ佐藤応渠(元長)に漢詩を、依田学海に漢文を、福羽美静、加部巖夫に和歌を学ぶ。	
1881	明治14年	19	7月4日、東大医学部を卒業。 12月16日、陸軍軍医副(中尉相当)に任ぜられ、東京陸軍病院課僚を命ぜられる。 千住に転籍し、父の医療を手伝いながら、人力車で陸軍病院に通った。以後、ドイツ留学までの四年をこの地で過ごす。	
1882	明治15年	20	第一管区徴兵副医官となり栃木、長野、新潟を巡回。 陸軍軍医本部課僚となり、プロシヤの陸軍衛生制度を調査し、「医政全書稿本」一二巻を編述。「北游日乗」一卷成る。	
1883	明治16年	21	欧州に派遣される橋本綱常(東京陸軍病院長)の随行を	

申し出たが認められなかった。後に陸軍衛生部から留学  
についての上申書が提出される。

1884 明治17年	22	6月7日、陸軍衛生制度調査、軍陣衛生学研究のため ドイツ留学を命ぜられる。	(ドイツ留学) 1884年(明治17年) 8月24日 横浜港出港 10月11日 ベルリン着
1885 明治18年	23	5月27日、陸軍一等軍医(大尉格)に任ぜられる。 10月22日 ライプチヒ滞在、	10月22日 ライプチヒ滞在、ホフマン教授に師事 1885年(明治18年)5月12日～14日ドレスデン出張
1886 明治19年	24	3月8日 ミュンヘン滞在	ドイツ第12軍団の負傷者運搬演習を見学 8月27日～9月12日、マッヘルン、テーベン、ネルハウ
1887 明治20年	25	4月16日、ベルリン滞在	方面出張、ドイツ第12軍団の秋季演習に参加 10月11日、ドレスデン滞在、「日本兵食論」「日本家屋論」を著
1888 明治21年	26	7月5日、石黒忠恵(ただのり)軍医監に従いベルリンを 出発、帰国の途につく。 9月8日、横浜着。陸軍医学舎教官に補せられる。	12月23日～30日、ライプチヒ旅行 1886年(明治19年)2月19日～23日、ドイツ軍医会に出席
1889 明治22年	27	1月、「東京医事新誌」の緒論欄執筆者となる。 3月6日、海軍中将男爵赤松則良の長女登志子と結婚	3月8日 ミュンヘン滞在、ペッテンコーフェル教授に師事 8月9日～11日 ベルリン出張、日本の軍医部購入人の点検
1890 明治23年	28	1月、「国民の友」に「舞姫」掲載。 6月6日、陸軍軍医学校教官。 「棚草紙」に「うたかたの記」掲載。 9月13日、長男於菟(おと)生まれる。 11月、妻登志子と正式に離婚。	9月2日～18日 シュタインベルグ旅行 1887年(明治20年)4月16日、ベルリン滞在 ベルト・コッホ教授に師事。衛生試験所に入所 最初、マリエン街三十二番地 次いで、僧坊街(クロステル街)九十七番地 最後に、大首街(グロース・プロシデンテン通り)十番地 に居住。
1891 明治24年	29	1月、「新著百種」に「文づかひ」掲載。 2月、東京美術学校解剖事業を嘱託さる。 8月24日、医学博士の学位を受ける。	9月16日～10月9日カールスルーエ、ウィーン出張 第4回国際赤十字総会、バンコク衛生会議出席 1888年(明治21年)7月5日 ベルリン発
1892 明治25年	30	1月末、本郷駒込千駄木町二十番地に移り、祖母・父母同居 8月、観潮楼と名づける。	9月8日 横浜港着
1893 明治26年	31	「衛生療病志」に「傍観機関」を載せ、医界のボスと論争し翌年に及ぶ。 11月14日、陸軍軍医学校長に補せられる。	
1894 明治27年	32	8月、日清戦争勃発し、中路兵站軍医部長に補せられ出征 10月、台湾より帰国。陸軍軍医学校長に復職。	(帰国後の経過) 9月12日、鷗外を追ってドイツ女性エリーゼ・ヴィーゲルト来日
1896 明治29年	34	1月22日、陸軍大学校教官を兼補せられる。 雑誌「めざまし草」を創刊。斎藤緑雨、幸田露伴と合評形式 の文芸批評「三人冗語」を掲載。 4月4日、父静男没す。	築地の精養軒に入る 10月17日、さまざまな経緯ののちエリーゼは横浜を出港 鷗外、弟篤次郎、妹喜美子の夫・小金井良精が見送った 1889年(明治22年)2月海軍中将男爵赤松則良の長女登志子と
1897 明治30年	35	中浜東一郎、青山胤通らと公衆医事会を設立、「公衆医事」 を創刊。小金井喜美子と共書で春陽堂から翻訳・評論集 「かげ草」刊行。雑誌「新小説」に「そめちがへ」発表。 陸軍大学校教官を辞す。	内輪で式を挙げ、3月に披露。同年1月から5月まで 豊島郡金杉村字杉崎百六十四番地(現:下谷区上根岸町 百二十二番地)に住み、5月末、下谷区上野花園町十一番地 (現:台東区池之端三ー三ー二十一、水月ホテル鷗外荘)に
1898 明治31年	36	10月1日、近衛師団軍医部長兼陸軍軍医学校長に補せらる 「時事新報」に「智慧袋」連載。「西周伝」刊行。	転居。9月、長男於菟が生まれ、10月、この家を出て 本郷区駒込千駄木町五十七番地(現:文京区向丘2ー20ー7)

1899 明治32年	37	6月8日、陸軍軍医監(少将格)に任ぜられ、第十二師団軍医部長(九州小倉)に補せられる。鍛冶町八十七番地に住む。12月、フランス語を学び始め、師団将校にクラウゼヴィッツの「戦争論」を講義。	の借家に入った。(千朶山房) 11月、正式に登志子と離別した。1892年(明治25年)1月までここに住み、1月31日本郷区駒込千駄木町二十一番地(現:文京区千駄木1-23-4)の家を購入し、8月玄関2回を増築ここを観潮楼となづけ、終の住処ととなった。
1900 明治33年	38	1月、福岡日日新聞に「鷗外漁史とは誰ぞ」掲載。同28日、旧妻赤松登志子没。「二六新報」に「心頭語」連載。曹洞宗の僧侶(安国寺住職)、玉水俊斌との交流始まる。京町五丁目一五四番地に転居。	
1901 明治34年	39	1月15日、アンデルセン「即興詩人」訳了。クラウゼヴィッツの「戦争論」翻訳。発行。	
1902 明治35年	40	1月4日、判事荒木博臣の長女志げと観潮楼において結婚、8日、小倉に帰る。3月14日、第一師団軍医部長に補せられる。28日、小倉を発し、観潮楼に入る。「即効詩人」刊。雑誌「万年草」創刊。	
1903 明治36年	41	1月7日 長女茉莉生まれる。琵琶歌「長宗我部信親」。「大戦学理」翻訳出版。「人種哲学梗概」「黄禍論梗概」と題して講演、(梗概博士)と揶揄される。いずれも後に刊行。	
1904 明治37年	42	2月10日、日露戦争勃発し、3月第二軍軍医部長に補せられる。4月、出征、陣中詠「うた日記」を創作。	
1905 明治38年	43	戦地から「心の花」、「明星」に詩歌を投稿。9月日露戦争終結	
1906 明治39年	44	1月12日、東京に凱旋。6月10日、歌会・常磐会を興し、賀古鶴所と幹事に。(大正11年まで185回続く)	
1907 明治40年	45	与謝野寛、伊藤左千夫、佐々木信綱らと観潮楼歌会を興す。石川啄木、吉井勇など若い歌人も参加。8月9日、二男不律生まれる。9月「うた日記」公刊。千葉県夷隅郡東海村日在に別荘を設け(鷗荘)と名付けた近くに賀古鶴所の(鶴荘)もあった。11月、陸軍省医務局長に補せられる。	
1908 明治41年	46	1月10日、弟篤次郎(三木竹二)死去。前年の8月4日に生まれた次男の不律も2月5日死去。臨時脚気予防調査会会長就任。臨時仮名遣調査委員会において文部省に反対する意見を述べる。「能久親王事蹟」発行。教科書用図書調査委員会委員長に就任。	
1909 明治42年	47	3月、雑誌「昴」に「半日」、5月「東亜之光」に「追儺」を載せる。5月27日、二女杏奴生まれる。7月、「昴」に「キタ・セクスアリス」を掲載。発禁。同24日、文学博士の学位を授与。旺盛な創作活動始まる。「阿育王事蹟」発刊。〈東京方眼図〉を考案。昴に「椋鳥通信」連載開始。	
1910 明治43年	48	慶応義塾大学文学科顧問となり、永井荷風を文学科教授に推挙。昴に「青年」、三田文学に「普請中」「あそび」「花子」「沈黙の塔」を掲載。観潮楼歌会終わる。	
1911 明治44年	49	2月11日、三男・類生まれる。「烟塵」刊行。三田文学に「妄想」発表、昴に「雁」の連載。	

			5月17日、文芸委員会委員を命ぜられる ゲーテ「ファウスト」の翻訳を委嘱される ハプトマン戯曲翻訳「貧しき人々」刊行。
1912 明治45年 大正元年	50	1月5日、「ファウスト」訳了。 「かのように」「藤棚」発表。5月、与謝野晶子訳「新訳源氏物語」の校定。シュニッツレルの翻訳「みれん」刊行。 7月30日、明治天皇崩御、9月13日大葬の夜、乃木夫妻自刃。 9月18日、最初の歴史小説「興津彌五右衛門の遺書」を執筆	
1913 大正 2年	51	ゲーテ作「ファアスト」一部、二部翻訳出版。シェックスピア、イプセンなどの翻訳出版続く。「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」、「佐藤甚五郎」所収の歴史小説集「意地」刊行。	
1914 大正 3年	52	「大塩平八郎」「護持院原の敵討」「天保物語」「堺事件」刊行。	
1915 大正 4年	53	1月「山椒大夫」発表。「雁」、詩歌集「沙羅の木」刊行。 1月22日、大嶋陸軍次官に辞意を告げる 11月10日、京都で大正天皇即位大礼に参列。 10月、渋江抽斎と文通を始める。	
1916 大正 5年	54	1月、東京日日新聞に「渋江抽斎」を連載(5月迄)。 「高瀬舟」「寒山拾得」発表。 3月28日、母峰子没。 4月13日、陸軍軍医総監、医務局長辞任。依願予備役。	
1917 大正 6年	55	6月、東京日日新聞、大阪毎日新聞に「伊澤蘭軒」の連載 9月、「伊澤蘭軒」連載終了。「細木香以」随筆「なかじきり」発表。 10月、東京日日新聞、大阪毎日新聞に「北条霞亭」連載 12月、帝室博物館総長兼図書館頭。	
1918 大正7年	56	創作集「高瀬舟」発行。正倉院曝涼のため奈良へ出張。	
1919 大正 8年	57	9月8日 帝国美術委員長に任ぜられる 「帝諡考」起稿、新聞所載創作集「山房礼記」出版。	
1920 大正9年	58	「霞亭生涯の末一年」をアララギに連載。 腎臓病の兆候が現れる	
1921 大正10年	59	「帝諡考」刊行。「元号考」起稿。第二次明星の創刊にかかわり、「古い手紙から」を起稿。臨時国語調査会会長就任。 「霞亭生涯の末一年」完結。	
1922 大正11年	60	6月29日、額田晋の診察で、委縮腎、肺結核進行。 7月6日、賀古鶴所に遺言を筆記させる。同9日午前7時死去。 向島弘福寺に埋葬、昭和2年、三鷹禅林寺に改葬。	